

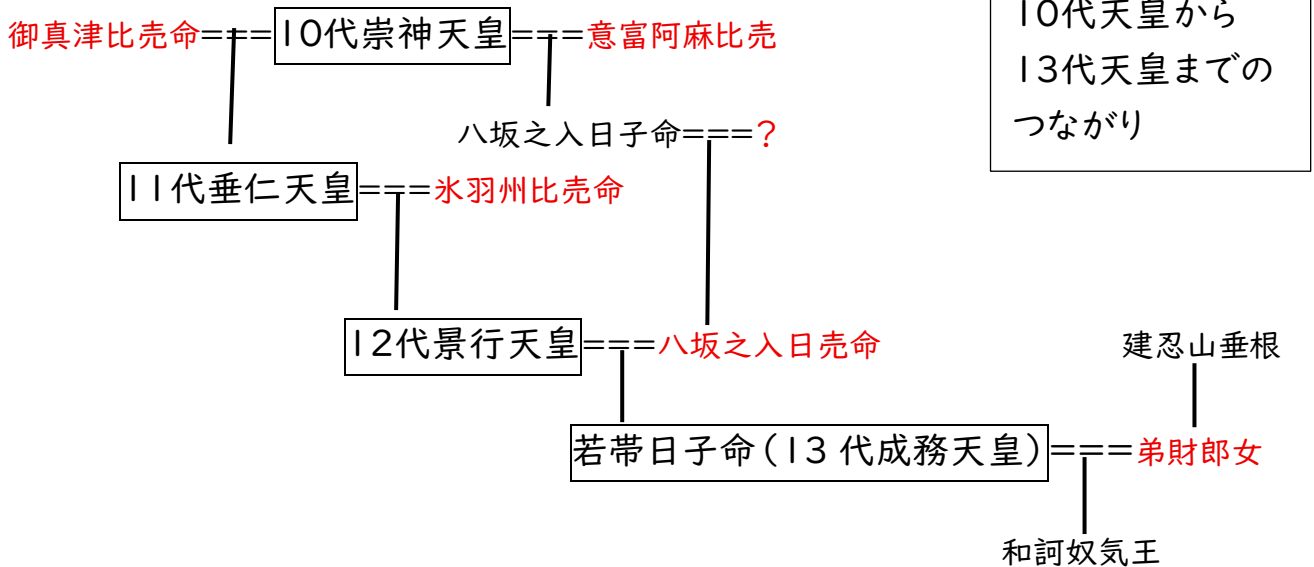
古事記から学ぶ その 19

成務天皇と仲哀天皇

<1> 成務天皇

12代景行天皇のあとを治めたのは、●**八坂之入日売命**（やさかのいりひめのみこと）との間に生まれた四人の御子のうちの、第一子である若帯日子命（わかたらしひこのみこと）で、13代成務（せいむ）天皇となった。ここで少々時代を遡ると・・・（古事記から学ぶ その 13 参照）

10代崇神天皇と**意富阿麻比売**（おおあまひめ）との間に生まれたのが八坂之入日子命（やさかのいりひこのみこと）。この八坂之入日子命の娘が**八坂之入日売命**（やさかのいりひめのみこと）である。天皇のつながりだけを抜き出した系図にまとめると下図のようになる。つまり、10代崇神天皇の腹違いの孫同士が結婚したということである。



成務天皇は、志賀の高穴穂に宮殿を造って國を治めた。「志賀の高穴穂」は、琵琶湖西岸の唐崎付近で、現在の滋賀県大津市の穴太（あのう）だと言われている。

この天皇は、穂積の臣などの祖先である●**建忍山垂根**（たけおしやまたりね）の娘である●**弟財郎女**（おとたからのいらつめ）を妻として、●**和訶奴気王**（わかぬけのみこと）を生んだ。

●**建内宿禰**（たけしうちのすくね）を大臣に任命し、大小の国々の境界を定めて、国造を定め、大小の「県（あがた）」を定めて、県主を定めた。

95歳で他界し、陵は沙紀（さき）の多他那美（たたなみ）に造られた。現在の地図で見ると、奈良市山陵町（みささぎちょう）で、近鉄京都線の平城駅の南東になる。 <https://yahoo.jp/Sx7EJ3D>

<2> 仲哀天皇

倭建命と**石衝毘売命**との間に生まれた帯中津日子命（たらしなかつひこのみこと）が14代の仲哀（ちゅうあい）天皇となった。この天皇は、穴門（あなと：のちの世で言う長門）の豊浦に宮殿（あなとのとよらのみや）を造った。宮殿があったとされる場所には、現在は忌宮（いみのみや）神社がある。

<https://yahoo.jp/VjLp96>

さらに筑紫の訶志比（かしい：現在の香椎）にも宮殿を構えて次の世を治めた。

<https://yahoo.jp/p4rvUy>

この天皇は、大江王（おおえのみこ）の娘である●**大中比売命**（おおなかつひめのみこと）を妻として、香坂王（かごさかのみこ）と忍熊王（おしくまのみこ）を生んだ。

また、**息長帯比売命**（おきながたらしひめのみこと）を太后として、●**品夜和気命**（ほむやわけのみこと）・●**大鞆和気命**（おおもわけのみこと）を生んだ。大鞆和気命は別名を品陀和気命（ほむだわけのみこと）と言った。生まれたばかりの時に、弓を射る時に左手に着ける「鞆（とも）」という弓具のような肉があったことからこの名がついたと言われている。

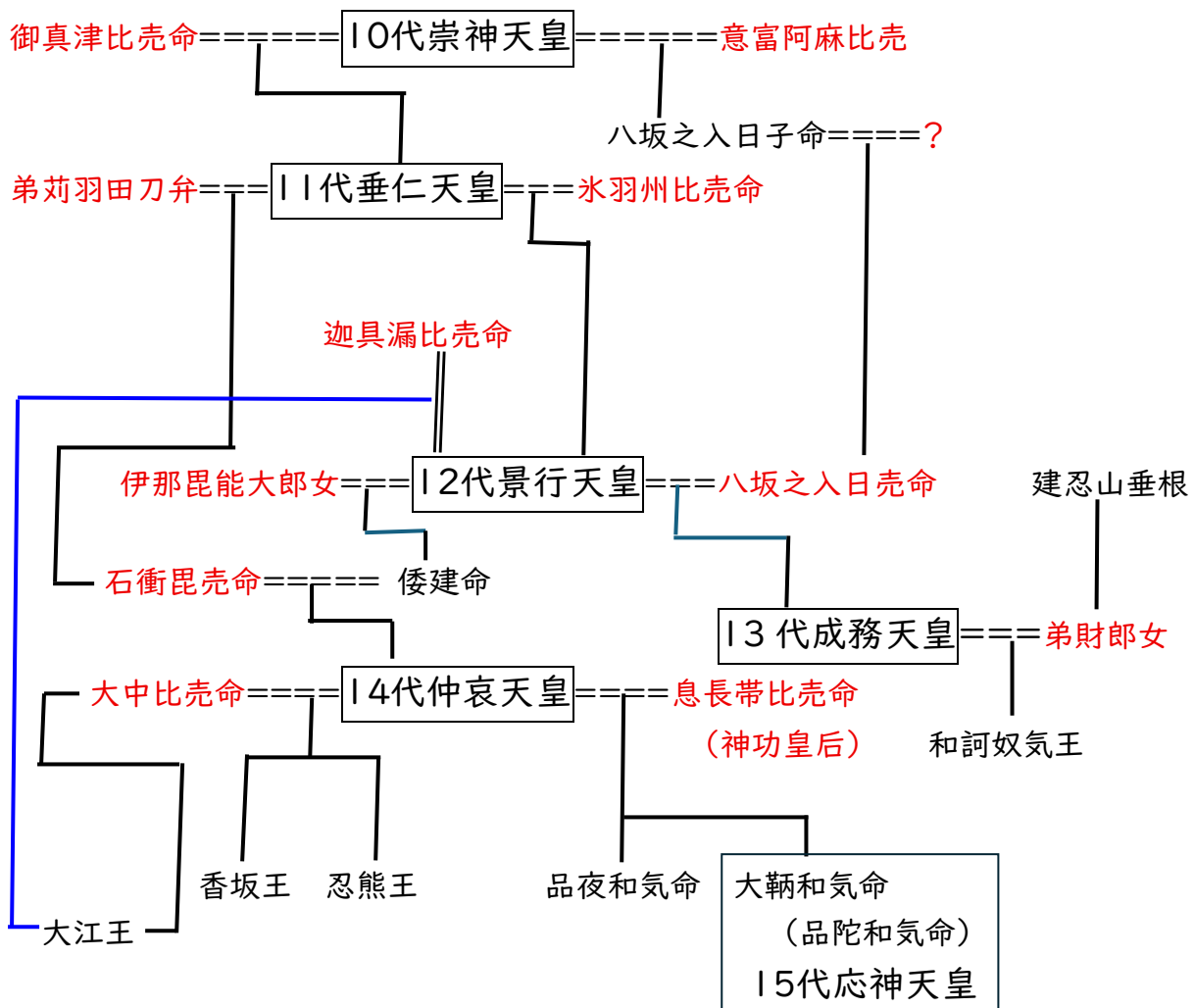
このことから、母の胎内にあって異国を平定したとも、のちの世で語られた。

この天皇の御代に、淡路の屯家（みやけ）を定めて、上納の穀物を納めた。

前項で「崇神天皇から成務天皇までのつながり」を系図にまとめたが、ここに仲哀天皇を加えて、さらに少々先読みをして、次の代である15代応神天皇と神功皇后の存在も書き加えてみた。

6代にわたる天皇の系図は、天皇を中心とした部分に留めたが、こんな入り組んだ図になった。折から、皇室典範見直しの議論が報道されていて、何だか複雑な気分になってきた。

10代天皇から15代天皇までのつながり



<3> 仲哀天皇の最期とその後

仲哀天皇の太后である**息長帯比売命**（おきながたらしひめのみこと：神功皇后）は、神懸りになっていた。天皇が筑紫の訶志比の宮に居て熊曾の國を討とうとしていた時、神を招くために琴を鳴らして、大臣の建内宿禰が神の御言葉を伺った。すると、太后に神が乗り移り、こう告げた。

「西の方に一つの國がある。金銀など珍しい宝石が沢山ある。私がその國を従わせてやろう」

天皇は、「高い所に上がっても、海が広がるばかりで國らしいものは見えない。」と言って、琴を鳴らすことも止めてしまい、偽りごとに違いないと思い、お告げを受け入れなかった。神は激しく怒った。

「私が教えた國ばかりか、この國もお前が治める國ではない。この世ならぬ遠くの國へ行ってしまうえ」

建内宿禰が、「どうぞ、そんなことは仰らずに琴をお弾き下さい」と取りなして、

天皇は渋々琴を弾き始めたが、いくら経たぬ間に音がしなくなった。灯火をかざして覗いて見ると、天皇は息絶えていた。

神の怒りに触れたと感じた取り巻きは、本葬までの間亡骸を仮安置する殯宮（あらしのみや）に移して、様々な供え物を取り寄せて穢れを祓う儀式を行った。

神の言葉は、「この國は太后の腹の中にいる御子が治めるべきだろう」

建内宿禰が、「太后の腹の中にいる御子は、男か女か」と尋ねた。神の言葉は、「男だ」

「ところで、あなたはどなたですか。名前をお聞かせください」神は建内宿禰の問いに答えた。

「これは、天照大御神の御心から出ている。これを執り行うのは、●底筒男（そこつつのを）・●中筒男（なかつつのを）・●上筒男（うわつつのを）の三柱の大神である」

これらの三柱の墨江（すみのえ）の大神は、ここで初めて現れた。

<閑話休題>

「古事記現代語訳」には、この三神は「ここで初めて現れた」と書いてあるが、この神が生まれたいきさは、「古事記に学ぶ その3」に「伊邪那岐命の旅とその終わり」として書かれている。

底筒男（そこつつのを）・中筒男（なかつつのを）・上筒男（うわつつのを）は、

伊邪那美命に先立たれた伊邪那岐命は悲しみのどん底にあった。意を決して、伊邪那美命との再会を願って黄泉国（よもつくに）へ足を踏み入れることにしたのだが、見てはならぬ國のありさまを見て心身ともに大きなダメージを受けて、辛うじて帰ってくることができた。

そして、黄泉国で穢れ切ってしまった我が身を清めた。

伊邪那岐命は身に着けていたものをすべて脱ぎ捨て、朝日に輝く川の流れに入っていく、中瀬あたりまで進んで水にくぐり、水を注ぎ、洗い清めた。水底で清めた時に生まれたのが底筒之男命（そこつつのをのみこと）、水中で清めた時に生まれたのが中筒之男命（なかつつののをのみこと）、水の表で清めた時に生まれたのが上筒之男命（うわつつのをのみこと）。

いずれの神も、星により航路を決めた当時の「海路を守る神」である。

*古事記に学ぶ その3 <http://www1.u-netsurf.ne.jp/~TKOB/kojiki03.pdf>

以上